Museum News

絵：柳田 基

2023 展覧会

企画展
寿岳文章展
―領域なき探究: 英文学、民芸、和紙研究―
2023.10.10㊋▸12.9㊏

※詳細は4ページをご覧ください。

平常展
校歌制定90周年　《空の翼》展
特集陳列
西鶴没後330年記念
関西学院大学図書館所蔵
西鶴貴重本展
2024.2.19㊊▸4.20㊏
休館日：日曜日、祝日

1933年に制定された関西学院の校歌《空の翼》は2023年度で90周年を迎えました。これを記念し、その誕生までの道のりとともに現在も歌い継がれている様子をご紹介します。

特集陳列では大学図書館が収蔵する井原西鶴の貴重本を大学博物館として初展示します。

寿岳文章と民衆の美

民芸運動と関西学院

2023年10月からの企画展「寿岳文章展―領域なき探究：英文学、民芸、和紙研究―」は、関西学院の出身者で、教員としてもここで教鞭をとった寿岳文章に焦点をあてたものである。複数の項目が副題に含まれているのは、研究者（探究者）としての寿岳の関心の幅の広さを示している（これでもカバーしきれていないのだが）。

ここでは、この3つの項目のうち、「民芸」なるものに注目してみる。民芸とは、現在では「民芸品」「諸国民芸」といった言葉で一般名詞として定着しているが、もともとは、大正時代の最末期に柳宗悦（1989-1961）という思想家を中心に展開された民芸運動という文化運動によって提唱され、定着した言葉である。柳らがこの言葉を発案したのは、1925（大正14）年のこととされており、ちょうど100年を迎えようかという時期にあたる。そのような背景もあって、2021年には東京国立近代美術館にて「民藝の100年」と題された高密度な企画展が開催されたし、現在も「民藝MINGEI　美は暮らしのなかにある」という企画展が全国巡回中である（10/28からは、いわき市立美術館にて開催される）。同時にここ20年ほど、ファッション・デザイン分野へも波及しつつ、民芸運動とつながりのあった産地の製品などへの関心も高まっており、民芸はややホットな対象となっている。

じつはこの民芸運動と関西学院には、いくつかの関わりがある。先に触れた柳宗悦は、生涯の活動拠点のほとんどを東京においていたが、関東大震災後の一時期に京都に居を構えていた期間があり、その時期に同志社とともに関西学院に英文学講師として所属していたことがあった。また、のちに岡山県倉敷市の倉敷民藝館館長などをつとめ、柳没後の民芸の普及に大きな役割を果たした外村吉之介（1898-1993）は、関西学院の神学部の卒業生であった。そして、寿岳である（この関係については『民藝』835号（2022年）が特集「寿岳文章と民藝運動」を組んでいる）。本通信13号においても述べたことだが、関西学院に連なる美術・文芸関係の人脈の広がりは、こうしたところからも感じることができる。

三宅忠一と寿岳文章
―「解放的」であることへの意識―

ところで、民芸運動も他の同様の運動体・グループと同様、内部には大小のいざこざがあった。そのうちでもっとも大きなものの一つが、三宅忠一（1900-1980）という運動同人の離反と新たな運動体組織の立ち上げだった。1950年代の後半、三宅は、民衆的な雑器の持つ美を顕彰するはずの民芸運動が、作家による高価な作品を称揚するようになっているとの批判を展開し、民芸運動は、民衆・工人に寄り添ったものであるべしと主張した。それは、最晩年の柳に対する強い口調での批判も含め、運動体内で大きな反発を招き、結果、当人の脱退という形での幕引きとなった。三宅の主張の詳細や評価はここで述べるゆとりはもちろんないが、以下では、この騒動後にも、三宅と一定の関係を保ち続けた寿岳による三宅評を紹介してみたい。

寿岳は、「つねに消費者を大衆に求め、閉鎖的ではなく解放的であり、少数の鑑識者による厳しい選択［中略］よりも、次善であろうとかまわないから、一人でも多くの人々を民芸の世界に結縁させようとの庶民的な態度」を持つと三宅を評価する。そして、「もちろん民芸品の性質上、機械によるような量産は望まれない。しかしその限界の中で、現在および将来の生活形態をたえず考えながら、時代に即応し、清潔な環境衛生ともマッチする民芸品の普及に努力する三宅さんの仕事は、いつか感激を以てふりかえられる日がきっと来るだろう」とする（寿岳文章「三宅さんの仕事」、『柳宗悦と共に』集英社、1980［初出1964］）。

三宅と寿岳との関係は、本展図録所収の中島俊郎「寿岳文章―知識人の肖像―」にも言及があり、そこでも、寿岳による別の三宅評に寿岳の思想のあらわれを指摘しているが、それはここでも同様で、自らの意図するところを、つねに「現代」に向かって、問い、ひらくことは、寿岳の営みのなかにも通底してみられることであったろう。そのようなことを念頭に、ちょっとした「民芸ブーム」の昨今において寿岳文章の探究の世界にゆっくりと浸ってみてもらえればと思う。

（大学博物館長 濱田琢司）

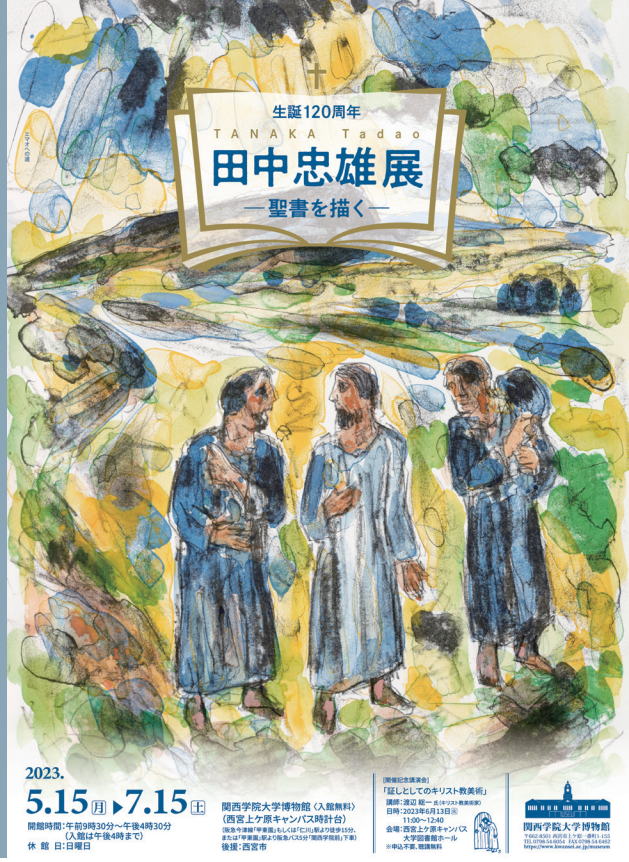
展覧会報告 I

企画展

生誕120周年
TANAKA Tadao
田中忠雄展
―聖書を描く―

関西学院所蔵の田中忠雄作品を一堂に集めた展覧会。聖書を題材にした油彩画 10 点とリトグラフ 10 点のほか、田中が関西学院の宗教行事用の冊子に贈ったカットやデザインしたステンドグラスについてもご紹介しました。

2023.5.15㊊ ▶7.15㊏
※休館：日曜日
開館日数　　54日
入館者数　1615人



キリスト教美術の画家

田中忠雄と関西学院

洋画家・田中忠雄（1903-1995）は聖書を主題にした油彩画や礼拝堂のステンドグラスなどを手がけ、日本におけるキリスト教美術の進展に寄与した人物です。戦前は労働者や風景を描いていましたが、戦後は画家としてどのような絵を描くべきかを模索し、自身のキリスト教信仰を背景の一つにして聖書をテーマに制作するようになりました。

本展覧会では生誕120周年を記念し、ミッション系の学校として関西学院が所蔵する田中作品を一堂に集めご紹介しました。田中は同窓生ではありませんが、生涯にわたって学院とさまざまな関わりがありました。札幌に生まれた田中は、牧師の父が神戸女子神学校（後の聖和大学、現・関西学院大学）の教頭として赴任したことにより、11歳（1914年）のときに神戸に移ります。1916年には平野尋常小学校（現・神戸祇園小学校）から兵庫県立第二神戸中学校（現・兵庫高等学校）へ進学します。学友には小学校時代からの友人で後に洋画家となる岸上（小磯）良平（1903-1988）や、関西学院文学部英文科で学んだ後に詩人となる竹中育三郎（郁、1904-1982）がいました。幼いころから美術に関心があった田中が中学校内の展覧会に出した作品は、関西学院のブランチ・メモリアル・チャペルを描いたものでした。この絵を褒められたことが画家になるきっかけの一つになりました。

その後、キリスト教美術の画家となった田中は、依頼を受け学院の「チャペル週報」や「クリスマス音楽礼拝」のプログラムにカットを提供し、また千刈セミナーハウスの礼拝堂にあったステンドグラス《聖書と自然》をデザインしました（現在ステンドグラスは上ケ原キャンパスの中央講堂に移設されています）。そして大学博物館は、田中を結成メンバーの一人として発足したキリスト教美術協会の展覧会を、2016年（第40回）と2021年（第45回）に関西展として共催しています。

『関西学院クリスマス音楽礼拝』プログラム 1993 年

展覧会の開催にむけて

作品の修理

本展の開催にあたり、学内にある田中作品の状態確認をおこないました。絵具の亀裂や剥離、カビなどの汚れが見られるものは、それぞれの状態に合わせた修理をしました。多くの田中作品は普段、会議室やチャペルなど人の行き交う場所に掛けられています。そのなかには絵画の前面をカバーするガラスやアクリル、裏面を守る裏板が入っていない額縁がいくつかありました。絵画の表面をカバーすることで、作品を傷やホコリなどから守ることができます。本展をきっかけに、すべての田中作品の額縁にカバーを入れることができました。

作品を定期的に点検し必要な修理を施すことは、作品を長く守るうえでとても重要です。大学博物館として、学院所蔵の美術品を展覧会でご紹介するだけでなく、学内のさまざまな部署にある美術品を長く美しく守っていくお手伝いができればと思います。

キリスト教主義教育の関西学院

キリスト教美術の展覧会

会期中の6月13日（火）には、大学図書館ホールにてキリスト教美術家の渡辺総一氏による開催記念講演会「証しとしてのキリスト教美術」がおこなわれました。田中から示唆された日本におけるキリスト教美術展の意義や教派を超えたつながりについて、さまざまなエピソードを交えながらお話くださいました。満席の講演会会場にはTV番組『ライフ・ライン』の取材も入りました。

講演会の様子

会場のアンケートには「繰り返し行ってもらいたい企画です」（60歳代、兵庫県）、「関学、こういう楽しいイベントやってくれるから好き。今回も見応えがあった。7/15迄にもう一度来たい」（20歳未満、大阪府）などの声が寄せられました。キリスト教主義教育の関西学院にある大学博物館ならではの企画展と講演会として、評価いただきました。

展覧会報告Ⅱ

平常展

原田の森から上ケ原へ
―学校のお引越し―

学院創立の地・原田の森から上ケ原への
キャンパス移転にまつわるエピソードを
ご紹介しました。

2023.7.31㊊ ▶ 9.30㊏
※休館：日曜日、祝日（8月6日㊐は開館）、8月11日㊎～21日㊊
開館日数　　44日

大学博物館は年に数回、学院の歴史をご紹介する「平常展」という展覧会を開催しています。博物館を訪れてくださる皆さまとともに本学が歩んできた道のりを振り返り、未来を築く礎としたいと考えています。

学校のお引越し

原田の森から上ケ原へ

1889年、神戸の東郊、原田の森（現・神戸市灘区）に創立した関西学院は、当初小さな学校でしたが、次第に教育面と施設面が整備され学びの場として発展しました。しかし1929年3月、学院は創立の地である原田の森を去り、上ケ原にやってきました。なぜ約40年かけて作り上げたキャンパスから新天地に移転したのでしょうか。移転の背景には、大学昇格に伴う経済的事情と原田の森キャンパスにおける教育環境の変化がありました。

からみあう問題

大学昇格とキャンパス移転

帝国大学以外の大学にも学位の授与が認められる大学令が1918年12月に公布され、学院内でも高等学部学生会を中心に大学昇格運動の機運が高まりました。1919年1月に開かれた高等学部臨時学生総会では大学昇格の推進を切望する決議文が議決され、4月には高等学部学生による大学昇格実行委員会が学院理事に対し嘆願書を提出します。これらを受け理事会は大学昇格に関する「大学委員会」を設け、アメリカとカナダのメソヂスト教会による連合教育委員会に具体案を送り賛同を得ましたが、折しも第一次世界大戦の不況による財政的理由から延期されました。この大学昇格の問題は、学院の移転問題とからみあって次第に具体化の方向をたどっていきます。

学院が自力での資金調達を考えていたとき、一つの案が浮上します。それは原田の森キャンパスを売却し上ケ原の土地を安く購入して得た差額を大学昇格のための資金とする案です。1925年の夏、友人の実業家・河鰭節（かわばたみさお）から阪神急行電鉄株式会社（現・阪急電鉄株式会社）沿線に格安の土地があることを知った高等商業学部教授の菊池七郎が、この話を神崎驥一（きいち）高等商業学部長とH. F. ウッズウォース文学部長に伝えたことがはじまりでした。その後、河鰭の尽力により阪神急行電鉄専務の小林一三と神崎の直接交渉が実現。1928年には土地売買について阪神急行電鉄と学院の間で正式契約が交わされました。

移転の必要性は大学昇格に伴う経済的事情だけではありません。創立者W. R. ランバスが校地として原田の森を選んだ理由の一つは、この地が喧騒の市街から離れ教育に適していることでした。ところが学院付近には次第に住宅や店舗が並び、また構内を斜めに通る道路を上筒井駅までの近道として利用する市民が増えていました。このような環境の変化に加えて原田の森キャンパスには大学昇格に必要な施設を増築するだけの十分な土地が残っていなかったことなども移転へと舵が切られる背景にありました。

こうして学院は創立以来多大の費用をかけて築き上げてきた美しい原田の森キャンパスから上ケ原へ移転することになったのです。移転は図書館、中学部、高等商業学部、文学部、神学部、総務部、構内住宅の順に約1カ月半をかけ、トラックや牛馬車による荷物の輸送をおこないました。予定どおり1929年3月31日に移転を完了し、4月1日より新校地での第一歩を踏み出しました。会場では学生の熱意を感じる決議文や阪神急行電鉄と学院の間で交わされた契約書、小磯良平による神崎の肖像画（初出品）などをご覧いただきました。

タイムスリップ！

移転当時の時計台

かつて上ケ原キャンパスの時計台は図書館でした。図書閲覧室やカード目録室があった時計台の2階は、現在、大学博物館の展示室と学芸員養成課程の授業をおこなう教室（実習室）になっています。本展では移転当時の時計台内部をご紹介する方法として、1930年の図書閲覧室の様子がわかる画像を大きなパネルにして撮影スポットを作りました。パネルの前には時計台が図書館だった頃に実際に使われていたと思われる椅子を置き、自由に座ってもらえるようにしました。この撮影スポットがある場所は、画像に写っている場所のすぐ近く。まるでタイムスリップしたかのような写真を撮ることができるスポットになりました。

▲撮影スポットの様子
撮影用小道具として本型のパネルを作成。図書閲覧室で勉強しているかのような写真を撮ることができる。

開催中の企画展

寿岳文章展

―領域なき探究：英文学、民芸、和紙研究―

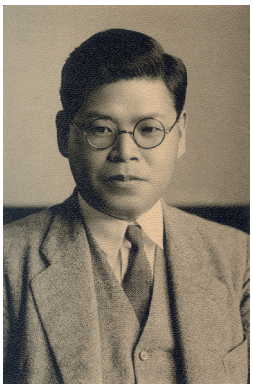
2023年10月10日㊋～12月9日㊏
※休館：日曜日、祝日（但し11月3日㊎、11月19日㊐は開館）

関西学院が生んだ著名な文化人の一人、寿岳文章（1900-1992）は専門分野にこだわらず、さまざまな研究をおこないました。彼は英国のロマン派詩人ウィリアム・ブレイクを研究した昭和を代表する英文学者であり、英国から日本に書誌学を導入した第一人者でもありました。また衰退する手漉紙の価値を訴え正倉院の和紙調査を率いた和紙研究家、世界的に評価が高い私家版「向日庵本」を出す書物工芸家、出版者という顔もありました。このような多岐にわたる活動の第一歩は、関西学院からはじまります。

真言宗の寺に生まれた寿岳は、仏教徒であり続けながら1919年に関西学院高等学部文科英文学科へ進みます。ここで出会った教員や書物を通じて卒業論文のテーマにブレイクを選んだことが英文学者への道を拓きました。彼の文学研究には仏門に生まれてキリスト教主義教育を受けた宗教的背景があり、その宗教観は1977年に読売文学賞を受賞したダンテ『神曲』の翻訳に色濃くあらわれています。また卒業論文をきっかけに、ほどなく民芸運動を創始することになる柳宗悦（1889-1961）とも親しくなりました。その後、書物の工芸性についても柳と共鳴して民芸運動に参画し、とりわけ和紙研究に没頭しました。

1932年から教員として関西学院に戻った寿岳は、同僚と協働し研究教育に寄与します。戦時下に教員という立場で学生を戦場に送り出さなければならなかったことは、悲痛な思いとして寿岳の心に残り続け、戦後は反戦を信条とする平和主義者としてジャーナリズムでも健筆をふるいました。

昨今、寿岳の全業績を検証する研究が活発におこなわれています。本展では寿岳の大きな広がりをみせる研究活動について、関西学院での諸活動とのつながりを強調しつつ、彼が手がけた書籍や日記、書簡などの資料から再評価します。この秋、ぜひ大学博物館で寿岳の「領域なき探究」の軌跡をご覧ください。



寿岳文章
（『法文学部第 2 回卒業アルバム』1938 年より）

『無染の歌』（複刻版）　1990 年（初版 1933 年）　個人蔵

【開催記念講演会】

「寿岳文章―知識人の肖像―」
講師：中島 俊郎 氏
（甲南大学名誉教授、日本ヴィクトリア朝文化研究学会会長、NPO法人向日庵理事長）
日時：2023年10月20日㊎
13:30～15:00
会場：西宮上ケ原キャンパス
大学図書館ホール
（地下1階）

【関連イベント】

◆第55回関西学院史研究会
「戦間期(1919-39)前半における関西学院
―「恒久平和」運動と英文学教育・研究―」
講師：井上琢智 氏
（元関西学院大学学長、元経済学部教授）
日時：2023年11月7日㊋
13:20～15:00
会場：西宮上ケ原キャンパス
大学図書館ホール
（地下1階）

◆第56回関西学院史研究会
「寿岳文章の仕事：
民藝運動への貢献を中心に」
講師：神田 健次 氏
（関西学院大学名誉教授（元神学部教授）、学院史編纂室顧問）
日時：2023年12月1日㊎
11:00～12:40
会場：西宮上ケ原キャンパス
大学図書館ホール
（地下1階）

関西学院大学博物館通信 第 15 号
KGU MUSEUM NEWS No.15
2023.10.20
関西学院大学博物館
〒 662-8501
西宮市上ケ原一番町 1-155
TEL 0798-54-6054　FAX 0798-54-6462
URL https://www.kwansei.ac.jp/museum